

まとめ

小児がん治療の発達のために、臨床試験による治療開発は必須である。小児がんの本格的な臨床試験の遂行のためには、牧本班で行っている基盤整備を進めることと同時に、プロジェク

トの立役者としての参加施設の自覚と活躍がぜひとも必要である。

著者連絡先

〒104-0045 東京都中央区築地 5-1-1
国立がんセンター中央病院小児科
牧本 敦

書 評

Epidemiology of Kawasaki Disease: A 30-Year Achievement (英文)

[ISBN 4-7878-1353-6]

柳川 洋, 中村好一ほか・編

発行所 (株) 診断と治療社
B5判 246頁
発行日 2004年1月
定 価 本体5,000円+税

「川崎病」は、川崎富作先生が最初に報告した病気であり、「Kawasaki disease」として、世界に通用している。すでに世界中で60以上の国・地域から患者発生の報告があるが、患者数はわが国が最も多く、この疾患に関する研究もわが国が世界をリードしている。しかし、言語の壁の問題があり、その全容が世界に向けて発信されているとは言い難い。この問題を少しでも解決するために、特定非営利活動法人日本川崎病研究センター（理事長：川崎富作）は、自治医科大学中村好一教授の協力を得て、これまでに刊行された川崎病に関する文献を網羅的に収集し、タイトルをすべて英訳した文献集「A Bibliography of Kawasaki Disease」を刊行している。

2002年4月に、川崎病の全国疫学調査に長年携わってこられた柳川 洋（埼玉県立大学学長、自治医科大学名誉教授）、中村好一（自治医科大学教授）両先生を中心とする疫学研究グループが、診断と治療社より「川崎病の疫学：30年間の総括」を刊行された。この本は、川崎病の疫学研究の集大成として大変価値の高いものである。この度、日本学術振興会科学研究費補助金（研究成果公開促進費）を得て、その英語翻訳版「Epidemiology of Kawasaki Disease: A 30-Year Achievement.」が刊行された。分量と経費の関係から日本語版原本の第2部資料篇は省略されているが、第1部解説篇の本文はすべて英語に翻訳されている。

わが国における川崎病の疫学研究の中心である全国調査については成績のみならず、データ収集方法、データ管理ファイルの形式など、これ1冊で、その全貌がわかるようになっている。これに加えて、全国調査データを利用した疫学研究、わが国と共同で実施した中国の疫学研究成績なども紹介されており、興味深い。

さらに、第1章の重松逸造先生（財団法人放射線影響研究所名誉理事長、1970年の第1回全国調査実施責任者）による、原因論を含めた川崎病疫学研究の総括、第2章の川崎富作先生による川崎病研究の歴史、第3章の診断の手引の変遷など、疫学のみならず川崎病研究の歴史や背景を知る上でも貴重な著書であり、特に若手の研究者にお勧めしたい。

日本語版原本が刊行されたあとに公表された第17回川崎病全国調査の結果（小児科診療 67 (2) : 313-323, 2004）は、英語翻訳版でも触れられていないが、早晚別の形で英語の論文として公表されるものと信じている。

世界の川崎病研究を推進していくためには、今後ともわが国の研究成果を英文で公表していく必要がある。そのための基礎資料として、あるいは英文で論文を公表する際の引用文献として、すべての川崎病研究者にお勧めしたい書籍である。

（国立成育医療センター院長 柳澤正義）